

第56回教育美術・佐武賞選考を終えて



橋本 光明 (はしもと みつあき)

公益財団法人教育美術振興会

教育美術・佐武賞担当理事

信州大学 名誉教授

えた新しい働きかけにも関心が集まっています。

応募原稿を開くと、新型コロナウイルスについて記述した内容が半数近く見られましたが授業とのかかわりには濃淡があります。次年度の課題にコロナウイルスと向き合うことを明記したものがあつたり、変化への柔軟な対応を行つたり、難局に立ち向かう実践がみられたりさまざまです。代表例を挙げます。

『逆境に立ち向かう力を育てる図画工作科の指導』（青森県弘前市）は、子どもが表現を楽しみながら予防対策の意識を高め、行動変容につなげるなど、この時期に相応しいテーマです。

『ピンチをチャンスに』（富山県砺波市）のテーマを掲げた研究は、コロナ禍での臨時休業中であってもネット環境を整えて教科の特色である視覚情報の効果を生かす内容でした。

『子ども・地域・学校をつなげるための美術教師としての役割と実践』（福岡県福岡市）は、コロナの影響で新たに授業を構想し、制作と鑑賞活動によって相互の連携を深め目的を達成しようとするものでした。他には、感染拡大防止の対応を教職員で何度も対話を重

ねた実践や、遠隔授業によって課題に向かう主体性や互いに認め合う連帯感などを深める実践研究などがありました。

選考会には三回行われ、委員の皆様のご公正で誠実な審議を重ねた結果、花輪大輔氏が教育美術・佐武賞、西澤智子氏が佳作賞に決まりました。オンラインでありながら疲れを忘れるほどに熱中した長時間の会になりました。それは、応募された方々のよさを見出しながら問題点や課題を示そうと努めたからです。もう一つは、学校現場の諸課題を把握していらつしやるゲスト委員の奈須正裕先生の丁寧かつ根拠に基づいた的確なご助言をいただき、話し合いが深まったことによりです。

「選評」後に主催者の（公財）教育美術振興会 西村理事長が「コロナ禍でありながら、本年も、校種も様々な16本の実践論文（報告）が集まりました」と述べられています。北は北海道から南は福岡まで全国各地からの応募がありました。校種は、小7点、小中一貫1点、中3点、中高一貫1点、高2点、大2点です。また、50～60代の教員や校長の投稿が半数の8点もありました。教職生活全体を通じて教員や管理職が学び続けることの重要性の高まりを知ることができます。教室からの多様な発信を次回も期待しています。

二年ぶりの海開きの話を聞き、コロナ禍による自粛の日々の長期化を改めて感じます。教育美術・佐武賞も昨年に続き今年もコロナの影響を受けました。しかし、応募状況は違っていました。昨年二月末の臨時休校の頃は応募締切り一カ月前であり、応募原稿が早くも事務局に届くことがありますが、多くの応募者は、実践研究をまとめているときでした。

第56回の今回は、本誌5月号表紙『新しい生活様式への取り組み』を描いた中学生の戸惑いと新鮮さなどの心境と応募者の気持が重なるように感じます。前例がなく、先の状況もわからない状況下で、指導者も感染症対策などの業務が増して実践研究に取り組む時間が限られる年になりました。一方、コロナ禍を契機に授業のあり方や自主性や関係性などを生み出すための学びの実現など未来を見据

選評

今回、論文を拝読しましたが、それぞれがユニークであり、同時に実践への深い示唆を与えてくれる優れた論考でした。

花輪論文は、先行研究との比較を通して、現代の小学生における人物描画の傾向の詳細を明らかにしています。知見のいずれもが興味深いとともに、今後の実践や研究を支える基礎資料を提供した点においても、まさに労作と言えましょう。加えて、「表そうとしたこと」や「工夫したこと」の記述数と満足度の間に見い出された相関などから、描画指導のあり方について踏み込んだ提言を試みており、従来の議論に新たな視座を提供するものとして、高く評価したいと思いました。

西澤論文は、オーセンティックで探究的な学習とすることで、学び取ったデザインに関する知識・技能の意味や可能性、さらに深めるべき課題などを生徒自身が見出す機会として、狙い通り、普通科や他の専門学科にも十分に応用可能な取り組みであり、今後における我が国の高校教育のあり方全般に大きな示唆を与えてくれる実践だと思えます。学習評価に関する取り組みも、高校における評価活動の充実に大いに参考となるでしょう。

牧井論文は、学校経営の視点から、図工・美術教育がもつ汎用的な資質・能力の育成の可能性を追究し、一定の成果を挙げている点を、高く評価したいと思えます。また、この取り組みを通して、児童だけでなく教職員も大いに学び成長したことが読み取れます。

牧井論文のような、図工・美術を専門とする校長ならではの学校経営を、私も何度か見てきました。そこでは、美的な生活の創造、感性の重視、手仕事の大切さ、さらに今日でいう個別最適な学びの視点などが、学校経営に適切かつ効果的に生かされていました。

同様に、図工・美術の教育ならではの資質・能力の育成、それも、色・形・イメージといった図工・美術の対象を基盤としつつも、さらに他の領域や対象に自在に活用の利く汎用性を兼ね備えた資質・能力の育成を、今後の図工・美術教育に期待したいと思えます。例えば、一九七七年の学習指導要領において、どの教科等よりも先んじてコンテツツフリーの立場を取り、コンピテンシー育成を標榜したのが図工科でした。その先見性が今一度豊かに開花し、カリキュラム全体へと波及すること、門外漢ながらに祈念しております。

ゲスト選考委員

奈須 正裕 (なす まさひろ)

上智大学総合人間科学部教育学科 教授



【プロフィール】

徳島市出身。徳島大学教育学部卒業。東京学芸大学大学院・東京大学大学院修了。博士(教育学)。国立教育研究所、立教大学等を経て現職。教育心理学を基盤に、教育方法やカリキュラムに関わる実践的研究を

行う。中央教育審議会教育課程部会委員。近著に『資質能力』と学びのメカニズム』『ポスト・コロナショックの授業づくり』(以上、東洋館出版社)『次代の学びを創る知恵とワザ』(ぎょうせい)など。

あいだ たかし
相田 隆司
東京学芸大学 教授



先行する優れた教育実践研究に触れたとき胸が高鳴りませんか。そして、こんな授業をするにはどのように子供に投げかければよいのか、何を準備すればよいのか、どんな姿を期待したらよいのか等々。明日この授業を行う授業者になってしまったかのような疑問が矢継ぎ早に次々と湧き上がってこないでしょうか。

優れた実践研究には、その実践研究が持つ意義や目的、方法、成果等々が明快に示されているだけでなく、実践の様々な局面で呼応しあう子供たちと指導者の姿が描き出されています。そして、学びの様相が具体的に多様な姿として（図版も含め）示されている。そんな実践研究に出会うと、きっと私たちはそのような素晴らしい実践をつくり上げた授業者に我が身を重ねて読みたくなるのです。

教育美術・佐武賞を受賞された花輪大輔さんの研究は、子供が描画に対する満足感を感じるときが、子供にとって表そうとしたことと工夫したことが結びついたことであることを、膨大な調査を

ベースに示すものです。その成果は、日々子供たちに伴走しながら支援にあたっておられる多くの先生方への大きなエールとなると考えられます。

佳作賞を受賞された西澤智子さんの研究は、工芸高校デザイン科に在籍する高校生への実践をまとめたものです。縦横に学力を拡張するカリキュラムの中で、教師の働きかけと生徒が発揮した力が魅力的に紹介されています。高校生が本研究で他機関等と連携しながら学びを深めていく姿は、今後プロジェクト型学習やそれを含むカリキュラムデザイン等を考えていくための良質な参考事例となると考えられます。

このほかにも、図画工作科の学習内容に全校で取り組むことにより見えてくる可能性が示される牧井正人さんの研究、中学生が取り組む「まちづくり題材」の学習過程を通して創造的な能力を捉えようとした古川拓明さんの研究、中学生・高校生に美術のより深い理解を可能にする絵画題材の位置づけをめぐる考察した野村由香里さんの研究等、多様な教育実践研究が提出されました。

また、いまコロナ禍にあつて教育実践においても様々な模索が続けられています。青森県の子供の生活に即した、子供がより必然を感じる課題設定を通じた実践のあり方を検討した研究などが見られました。

選 評

あべ ひろゆき
阿部 宏行
札幌大学女子短期大学部 教授



この教育美術・佐武賞に、応募された多くの研究や実践に、いつも心を打たれます。

第56回の応募に対しては、当初、コロナ禍により各地区での研究会や研修会にも制限が加わり、論文数に不安視するところがありました。しかし自粛の活動は、自身の実践に対して省察する時間をもたらすとともに、発表の場としての機会をもち、多くの応募があり、審査にも力がこもりました。そこで、多くの論文に心打つ出会いがありました。

心打つ要素を自分なりに省みると、研究対象とする実践や子どもに真摯に向かい合う姿であり、その人でなくてはできない「独自性」であったり、また、これまでになかった「新規性」であつたりしました。このたびの教育美術・佐武賞の花輪先生の論文は、私たちがこれまで「よい」としていた子ども中心の指導に対する「応援歌」であると同時に、一方で、これまでの指導が教師の独りよがりでなかったかを省察させる研究内容となつて

いました。

花輪先生は絵をかくということが、子どもにとって、どのような意味をもっているのかを膨大な調査データから検証し、指導のあり方を示唆しています。この論文のよさは、子ども観が変わらないこと、その指導観も変わらないことを指摘し、「教えること」の意味と「子どもの学び」を顕在化させたところにあります。

西澤先生の高校での実践報告は、これまでの多くの実践から、3年間のカリキュラムの構築が印象的でした。小・中学校で育成された図画工作・美術で学習したことが、デザインする力を育てて、高等学校で「探究型」の学習の核になっていることが、生徒の姿からも感じ取ることができる優れた論文でした。

他に、寺元先生の「造形遊び」の実践を報告された論文は、自発的な活動から「子どもの主体的な活動」を組織するという考えのもとに、興味ある実践が報告されていました。ただ「遊び」のもつ教育的で創造的な性格を「学習」と位置付けた「造形遊び」であることや、「何でもよいよ」は「どうでもいいよ」になる危険性があるなど、「共通事項」やこのたびの資質能力でまとめた「造形的な見方・考え方」の育成との関連で考察する必要があります。

来年も、全国の先生方の多くの授業実践や研究との出会いを待ち望んでいます。

さとう けんじ
佐藤賢司
大阪教育大学 教授



ちが変容＝成長することを教師は体験的に知っています。そしてそれは「子供にとってよりよい授業をしたい」という願いと重なり、新しい「試み」へとつながるのです。このように考えると、教師自ら行う教育研究は、明確な答えや終わりのない、明日への「試み」の連続と言うこともできるでしょう。それは非常に尊いことなのです。

教師自身による教育研究は、他の科学研究とはやや異なる性格があります。それは研究者が同時に教育の実践者でもあるということです。そうである以上、対象としての教育実践を、研究対象としてのみ客観的に捉えることは困難です。なぜなら、教師は目の前の子供たちの成長を願い、日々実践に取り組んでいるのであって、実験対象のように目の前の子供たちや自身の実践を相対化することが難しいからです。また、教育の成果や子供の成長は、今日授業をしたから明日表れるようなものではありません。PDCAが盛んに言われますが、学校は生産性をはかる工場ではありませんし、結果を検証する以前に、子供たちはどんな成長しているのです。では、教師は研究に向きなのか？といえ、決してそうではありません。日々子供の前に立ち、ともに学び続ける教師でしかできない「試み」があります。それによって子供た

ちが変容＝成長することを教師は体験的に知っています。そしてそれは「子供にとってよりよい授業をしたい」という願いと重なり、新しい「試み」へとつながるのです。このように考えると、教師自ら行う教育研究は、明確な答えや終わりのない、明日への「試み」の連続と言うこともできるでしょう。それは非常に尊いことなのです。今回応募された論文は、みなそのような尊い「試み」の記録です。校長としてアートによる学校づくりに取り組んだ牧井さんの実践、造形遊びの本質を特別支援学級の子供たちと見つめなおした寺元さんの実践など、受賞には至らなかったものの、優れた取組みが数多くありました。その中で佳作となった西澤さんの実践は、PBLの手法を取りながら、デザイン教育の本質＝課題発見・課題解決の学びを実現したもので、実践は高等学校の事例であっても、広く参考となり得るものでした。佐武賞の花輪さんの論文は、他の論文とはやや性格が異なり、実践というよりはかなり研究色の強いものでした。それにもかかわらず、審査員全員から高い評価を得たのは、この研究の成果・意義が、今後の教育実践に資するところの大きさをゆえです。これらの優れた研究成果をこのように共有できることは幸いです。大いに学び、次代の美術教育とともに「試みて」いきたいと思っています。

選 評

たけい ひとし
竹井 史
同志社女子大学 教授



「cone」から実践の見通しを得、具体的な手立てをした点は実践者に示唆を与えます。氏は、最終学年の授業において、現代的テーマのもとにプロジェクト活動を組織します。本論中の「セシカツ」の活動は、より具体的な実技指導の手立てが示すことで、バランスの取れた論文になったと思われます。

その他、優れた論文もありました。牧井論文は、学校長が自ら実践者となって進めた学校ぐるみの実践。校長としてのリーダーシップのあり方、教員に対する意識改革の手立てが示されることでさらに良い論文になったと思われます。古川氏の中学美術のまちづくりに関する実践は、具体的な実践の内容や分析の根拠となる生徒の言動が示されることでより充実すると思います。野村氏の「日本画」実践は、美術教育の新たな可能性を拓く実践的取り組みとして意義ある実践論文といえますが、美術教実践として領域のバランスをどう位置付けていくかが問われます。

花輪大輔氏の論文は、教育研究として説得力のあるものです。子どもの描画傾向に関する調査を根拠とし、法則化による描画指導法の批判的検討が行われました。主体性の伴わない表現は、子ども自身にとって喜びに満ち満足感のある表現とは言えないという考えが根底にあります。この点は、「キミ子方式」に対する法則化批判が始められた1990年代以降の傍証ともなりうる意義深い観点です。氏は、法則化による描画指導法は「学年進行に伴う子供の表現の可能性や多様性を疎外するだけでなく、子どもの絵に対する満足感の低下を招く可能性があり、「子供が絵を描くことの意味を見失う危険性を孕んでいる」と述べます。この主張は、無批判的に法則化による指導法に取り組んでいる（た）実践者に対し伝えたいと思います。西澤智子氏の論文は、本質的なデザイン教育を理解する上での実践として意義深く、同時に実践論文のモデルとして参考になる優れた研究だと思っています。カリキュラム構築にあたって、「Future

図工教師の苦悩や工夫が盛り込まれた好論文です。歴史的観点から見た造形遊びの丁寧で真摯なとらえや教科として造形遊びを成立させるための手立てを示すことが課題となるでしょう。他にも研究論文としての表記、論理性、根拠などを明確にすることで、論点が明確になり説得力も増すものも多かったことを記したいと思います。



令和の時代を迎え、未来を拓く学校教育への期待がふくらむ中、改訂された学習指導要領の全面实施が小学校から順次進行していくとしていた矢先のコロナ禍に見舞われたこの一年間。美術教育に携わる各学校の先生方が地道に取り組まれた成果を数多く拝読させていただきました。何よりも読者である全国の先生方へ元氣と勇氣を与えてくれる実践研究に出会う度に私もうれしく、また元氣をいただいた気がしました。応募された先生方の真摯なお取り組みに敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げます。

さて、花輪大輔氏の論文は、2,400枚にもわたる児童の描画作品と向き合い、アンケート調査と照らし合わせながら検証を試みた研究として高く評価できます。経験や勘に頼りがちな指導方法を見直し改善を図る上でのヒントが得られるのではないのでしょうか。私たち一人一人が自身の指導観や評価観を見つめ直す機会として読み込んでほしい秀作だと思いました。

西澤智子氏の実践は、専門課程ならではの充実した学びであり、地域社会へのかかわりから深い学びへと誘うカリキュラムの提案は、単に専門課程だからという枠にはめずに捉えたい内容で、小中学校の先生方にも大いに参考になるものと思いました。

なお、受賞作以外にも読者を元氣付けてくれそうな実践研究が数多くありました。牧井正人氏の校長としてのリーダーシップを発揮して学校経営に取り組まれた実践研究や、特別支援学級における実践をもとに成果をまとめられた佐々木善憲氏や寺元幸仁氏の研究も各学校にとって大いに参考になる内容でした。

また、コロナ禍において子供たちのために何ができるかを念頭に試行錯誤をしながら実践を積み重ねた研究や、他教科等との関連を図り教科等横断的な学習計画を立案して実践した研究、あるいは地域との連携・協働の可能性を追い求めた研究などもそれぞれ取り組まれた先生方の真摯な姿勢が感じられるものでした。

今回は応募本数も多く、コロナ禍の困難な中にあっても果敢に取り組まれた先生方が全国にたくさんいらっしゃる事がわかり、心強い限りです。今回は幼稚園や保育所等での実践研究の応募も期待したいと思います。幼児期から大学等までの幅広い「美術教育」の実践研究論文と出会いたいものです。

選 評

第56回教育美術・佐武賞を迎えて

教育美術・佐武賞は今回で56回目を迎えることができました。本年もコロナ禍でありながら、校種も様々な16本の実践論文（報告）が集まり、教育美術・佐武賞に花輪大輔先生（北海道）、佳作賞に西澤智子先生（香川県）の論文が選出されました。大変な時期にも関わらずご応募くださった先生方、真摯に審査にあたってくださいました選考委員の先生方に改めてお礼申し上げます。

また当会では、第48回（平成25年）から教育美術・佐武賞の成果や実践に込めた「思い」などを『教育美術』の誌面で紹介するだけでなく、受賞者に直接賞状を贈呈するなどし、本賞が実践に取り組む先生方へのエールとなるよう努めてまいりました。

今後は受賞者が自ら論文のプレゼンテーションをするような機会も考えていきたいと思っております。

そしてこれからも本賞が契機となって学校現場における実践活動が活性化することを願っています。

公益財団法人教育美術振興

理事長 西村 貞一



オンラインで行った本選会の様子

